

口1 桜楓会アパートメントハウスの内部の様相について

日本女大家政 水沼淑子

目的 大正9~10年に建設された桜楓会アパートメントハウスは日本における集合住宅の極く初期の例である。建物の概要や建設の背景などについては既に明らかにしたが、内部の様相については明らかでない。本報告は各室の構成や設備など内部の様相を明らかにするとともに、大正期の住宅改良運動との関連を検討することを目的とするものである。

方法 内部の様相については『家庭週報』(桜楓会機関紙)、桜楓会所蔵の建設当時の写真等を資料とし、住宅改良運動との関連については『家庭週報』『建築雑誌』等を資料とし分析考察した。

結果 個室は板床に畳座敷で、ベッド・机・本棚・押入が造りつけられ椅子も備え付けとなっており椅子座の起居様式が採用されていた。共用部分としての食堂も板床で、木製の机と椅子が置かれ椅子座が採用されていた。この他便所には西洋便器が用いられるなど、内部は洋風の生活様式を前提として計画されていたことがわかる。日本における極く初期の集合住宅に洋風の生活様式が採用されていたことは、集合住宅発展の一段階として注目される。設備に関しては、台所は立式で床は防水仕上が施され、洗濯場には洗濯槽が備えつけられ給湯給水栓が設けられており、便所は水洗で西原式の浄化槽が用いられるなど充実がはかられている。大正期の住宅改良運動では、椅子座化など生活の洋風化や衛生設備の充実が目標とされていたが、上記のように桜楓会アパートメントハウスではそれらが具現化されていたといえよう。その実現には、生活改善同盟会の住宅改善調査委員であり、桜楓会アパートメントハウスの建設に深く関わっていた当時の桜楓会理事長井上香が大きく影響を及ぼしていたものと考えられる。

註) 拙稿「桜楓会アパートメントハウスについて」、『建築学会誌』57年、58年大会、58年建築研究報告。